

雲井龍雄顕彰会 会員の皆様

## お知らせとお詫び

コロナウィルスはこれまで経験したことの無い多大な影響を社会生活に及ぼしています。その収束も未だ見えずに、新しい生活様式を私達に強制しています。顕彰会の活動も変更を余儀なくせざるを得ない状況となりました。会員の皆様には、2021年銅像建立のスケジュールをお伝えしていましたが、延期いたします。2年先延ばしとし、2023年完成と改めて目標をたてました。ご理解ください。そんな中でも、銅像の具体的な姿図の完成や、設置場所の確定など、可能な事柄は進めてまいります。

近年は東日本大震災を初め百年に一度やら数十年に一度などの災害が多発しております。人間はその都度生きるすべを考え未来に向けて歩き出すものです。もうすぐ明日が見えてくると信じ頑張りましょう。

さて、皆様方の銅像建立に対する寄付は6月末で約300万円となっております。心より感謝いたします。これからは従前の寄付に加えクラウドファンディングなどを行いながら目標達成のため頑張りたいと思います。

NPO 法人雲井龍雄顕彰会の昨年度の活動状況をお知らせします。

## ① 雲井龍雄シンポジウム開催しました



昨年の5月に当会初めてのイベントを開催しました。約80の方が参加され、4人の講師の方々から雲井龍雄とその時代のことが紹介され非常に意義深い会となりました。また、多数のマスコミに取り上げていただき反響を得ることができました。

今年も第2回のシンポジウムを企画していましたが、コロナウィルスの収束が見込めなため中止しました。落ち着きましたら再度開催予定です。期日はまだ未定ですが、決定次第お知らせしますのでご期待下さい。

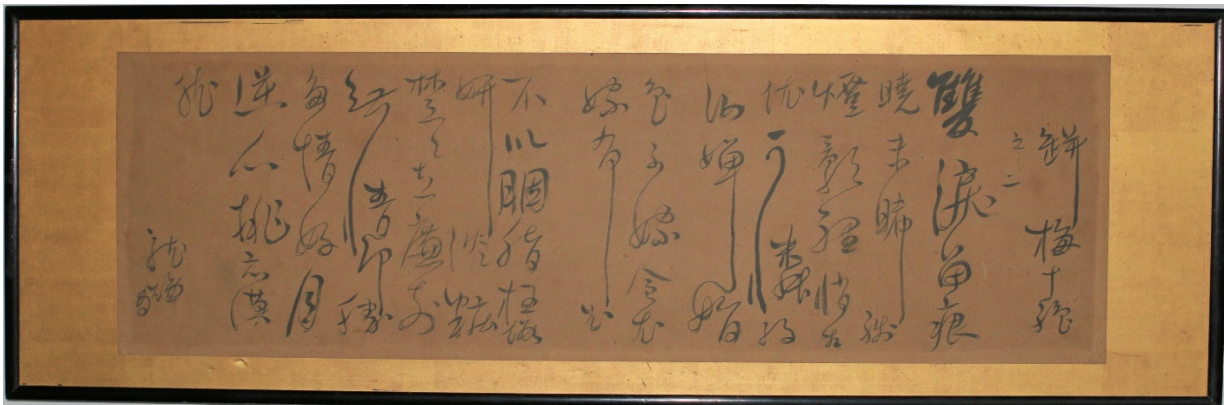
## ② 仙台の小関様より龍雄自筆の扁額を寄贈して頂きました



シンポジウムのマスコミ報道で当会を知り小関家家宝とされていた龍雄直筆の書を頂きました。

この書は第二次世界大戦の際、何があってもこれを持ち出せと言われたほどの物でした。その後鑑定により雲井龍雄直筆の書と認定されました。小関様に深く感謝します。

尚、寄贈頂きました扁額は龍雄の墓があります「常安寺」に展示させていただいております。



瓶梅 十絶  
 其二  
 雙淚留痕  
 曉未候、殘  
 燈影裡悄悄  
 依、可憐將  
 汝嬋娟  
 色、不嫁金衣  
 嫁布衣、  
 不似臙脂枉假  
 妍、淡粧  
 楚々立簾前、  
 無情却勝  
 多情好、目  
 逆心挑亦漠  
 然  
 龍雄  
 拜

瓶（かめ）に生けられた梅（女性を梅に例えた詩）

両の目から流れた涙はその跡を残して夜明けまでまだ乾かない  
 燃え尽きかけた灯の影の中でさびしげに何かにもたれかかっている  
 あわれあなたはあでやかで美しい顔を持っているのに  
 金持ちに嫁がず庶民の嫁になるとは

紅白粉（べにおしろい）でことさら美しさを飾らず  
 薄化粧でさわやかにカーテンの前に立つ  
 欲望の無さはかえって多欲な美に勝る  
 目を見張り心はかきたてられるがまた漠然と静かなことだ

雲井龍雄詩集「瓶梅」十篇の四及び二（十篇の七言絶句）より

「討薩の檄」のような檄文とは全く異なる甘美な情緒的漢詩も残しているところに、龍雄の人間性の魅力の広さを感じさせます。寄贈頂きました扁額と全く同じものが米沢市上杉博物館に米沢市内の方より寄贈されていました。短い人生の激動の年月の中で、どのような状況で、なんの目的で、作られたものなのか知りたいものです。

詩人として多くの漢詩を残していますが、現代では漢詩は高校の授業で習う程度で、実生活には縁遠いものです。その素晴らしさを理解するにはハードルが非常に高くなってしまいました。詩吟の世界では今も雲井の詩が吟じられているようですが、耳にしたり、目にしたりする機会は殆どありません。しかし、インターネットが誰でも使える時代になりネットの世界に雲井の漢詩、詩吟を鑑賞できるようになりました。ユーチューブで検索してみてください。

### ③ 藤沢周平文学愛好会との交流会を開きました

令和2年2月鶴岡の藤沢周平記念館で「藤沢周平と米沢」というイベントがあり、「雲奔る」の縁で地元鶴岡の「藤沢周平文学愛好会」の方々と交流しました。「どんがら汁」を頂きながら藤沢周平の教え子でもある会長の話を聞いたり、藤沢文学や雲井について語り合いました。



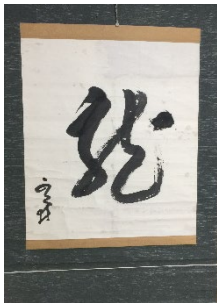
藤沢文学には実在した人物の作品は少ないと思いますが、その中でも無名に近い雲井龍雄を取り上げたのには、作者に強い思い入れがあったのではないのでしょうか。

### ④ 南会津との交流会を開きました



令和2年3月に福島南会津の方々と交流会を行いました。当地区には雲井の足跡が多く、彼の日記にも記されています。特筆すべきはこの地域では「会津のために戦った英雄」と崇められていることです。今迄米沢では奥羽越列藩同盟の中心であった米沢藩が、いち早く離脱し会津に応援を出せなかったことから会津に対し引け目を感じていた方が大多数とされていました。多くの会津の人たちもそのように思っています。

雲井龍雄だけは違いました。南会津だけでなく会津でも英雄視している方が非常に多いことに驚きました。それは新しい日本を作るため命を懸けて戦った姿に共鳴したのでしょうか。



南会津町役場振興課の湯田さんより連絡を頂戴しました。会津戊辰戦争の年、龍雄は南会津湯ノ花温泉を拠点として会津街道、沼田街道における薩長軍の動向を探っていました。その足跡が「瘡癩紀行」(しょうれいきこう)として残っており、その時の活動痕跡があるとのことでした。写真は龍雄が逗留した温泉宿(現在は民宿「ふじや」として営業されてます)に残る直筆と伝えられる掛け軸です。

雲井龍雄(くもいたつお)



雲井龍雄は幕末の米沢藩士で、戊辰戦争時會津藩を助けようとして沼田街道を南下し、尾瀬越えの際に湯ノ花温泉に投宿したといわれている。その時に宿の娘と恋に落ちた物語が浪花節「恋の雲井龍雄」宮川右近作曲によりうたわれている。また雲井龍雄の詠んだ詩は今でも詩吟愛好家の間で愛されている。

湯の花温泉には雲井龍雄の悲恋の話が残っていました。南会津町の観光パンフレットにも掲載されていました。時代背景として会津戊辰戦争の頃かと思われますが、命を賭けて走り続ける日々の中のロマンスに人としての生きた証が感じられます。

へ忍ぶれど色に出にけり我が恋は、物や思うと人の問うまで、実にこの道は思案の外、花はずかしき乙女子も、問わず教えず物思ふ、又蓋世の英雄も、遂踏み迷う深山路の、名もなき花の一枝に、つなぎ兼ねたる狂い駒、谷の深間に落ち込んで、儂なく消えしためしもあり、頃は明治の初め方、南会津と上州の、境いに続く山又山、その山奥の湯煙、あれが湯の谷湯ノ花村、「名主を兼ねた温泉宿、富士屋源右エ門

に二人の子供、兄源八が二十二才、年は若いがしつかり者、妹お花が十八才」

へ水もでばなの艶やかさ、湯ノ花小町の名はあれど、見る人もなき山里に、あたら盛りの八重山吹。

春過ぎて夏は湯宿のかき入時、その客足も秋風の、吹くや次第に散り失せて、山は紅葉の唐錦、妻恋う鹿の啼く音さえ、いとも淋しき夕まぐれ。

「お頼み申す。お頼み申す」、「富士屋を訪れた一人の若武者」、「野州より江戸への帰り道、御当所に名湯ありと承まわり、しばらく厄介になりとうござる」

「ようこそお出下さいました。これおす、ぎを」、「サアどうぞお上り下さいませ」

へ艶なす髪は大たぶさ、色は白く眉秀で、見れば見るほど良い殿御、この人こそは誰あろう、高輪二本榎にて、智勇武曲研々所、開いて数多の門弟と、秘かに同志を語いて政府を倒す大陰謀、その頭梁と仰がれし、雲井龍雄が仮りの名で、本名児島龍三郎。

「源八にとっては願うでもない珍客、囲碁の相手に事をよせては、雲井に近づき何くれとなく教えを受け。」

へ日に変りゆく都の風雲に、若い血潮を湧かしていた。

紅葉すでに散って、満山ことごとく枯すすき、秋老いて峯の頂き皆白し、湯ノ花小町とうたわれし、お花も雲井に傳ずいて、三度三度のお給仕に、朝夕床のあげおろし、きまりわるいも束の間の、今は寝起きのほつれ髪、好いてすかれて睦まじく、これが恋路の道筋と、知るや知らずや十八の、乙女心は恋風に、なびきがちなり袖たもと。

「楽しい夢の一ト月は過ぎ、或日の黄昏又も一人の侍が、雲井を訪れて参りました。」

「オウ……、ようこそ無事で達者でと、互いに手に手をとって喜ぶ、これぞ雲井の

片腕と頼む、原直鉄、その人であった。」

へその夜は二人寝もやらず、語りあかすを兄妹、聞き洩らさじと襖の外、そつと忍んでいたけれど、きこゆるものは遠寺の鐘、胸に悲しく響くのみ、源八お花が聞きたいと、あせる話しはきかれずに、明日はこの家を立つという、悲しき迎えのその言葉、お花は聞くより涙ぐみ、我を忘れて雲井のそば。

「雲井様出来ることならこの平和な湯ノ花村で、生涯を安楽に暮らしたいとおっしゃっておきながら、あなたは明日にもお立ちとは、あのお言葉はうそでござんすかい。」

「いや、武士に二言はない、殊に雲井龍雄、誓っていつわりは申さぬが、私情を捨て、国家のために命を捨て、も」、「エー」のり出さねばならぬ時が来たのです。」

「して又のお越しは」

「さあ、それははつきりとは約束は出来ぬが、首尾よく風雲に乗じたら、早速迎への使者を出す、もしやぶれたら永の別れ」

「源八には一振の短刀、お花へは錦の小袖形見に残して立去る龍雄」

へあとにお花は寂しくも、いつか宿した雲井の情、往來たがえぬ雁燕、又の逢う日待ち侘びしが、哀れ恋しきその人は、遂捕らわれて帰らぬ旅。

「兄源八も志を立て、雲井のあとを追って出たま、消息がない。」

へ忘れ遺品を護りつ、お花は一人湯ノ花の村に待てど甲斐なき夫と兄、身も世もあらぬ悲しみに、かたみの小袖身にまとい、あらぬ言葉を口走り、狂乱の身となりしとか、美女の最後や英雄の、恋と題した物語り。終り



私達、「雲井龍雄顕彰会」は銅像を建立する事と龍雄と彼の生きた時代を顕彰する事を目的とした会です。この1年皆さんのご協力により活動することができました。新しい発見が沢山ありました。これからも「未来のため」活動していきますのでご協力お願いいたします。

年会費振込用紙同封します。本年度分ご協力お願いいたします。すでに払込頂いた方には、活動に賛同していただける方をご紹介します。

顕彰会への問い合わせや、雲井龍雄に関しての情報お持ちの方は下記メールまでお願いします。

NPO 法人雲井龍雄顕彰会 事務局  
佐藤

[tbeeline913@gmail.com](mailto:tbeeline913@gmail.com)

今年はコロナのために、全てにおいて自粛が求められ、不本意ながら活動休止に追い込まれてしまいました。それでも雲井の菩提寺である常安寺境内に銅像建立を決め、その位置を検討しています。近いうちにお知らせします。

雲井龍雄という人物を現代にもっと身近に感じてもらうために、キャラクターイラストを作成しました。武力ではなく鋭い弁舌で「義」を説くイメージです。



コロナに負けないように、元気づけるために戦う雲井龍雄に登場してもらいます。

倒  
コ  
ロ  
ナ  
の  
檄

痺  
癢  
払  
拭



雲井龍雄

和暦	西暦	満年齢	年譜
慶応4年(明治1年)	1868年	24歳	1月 江戸にて師安井息軒のもとを訪ねる 1月中 京都着 新政府から實士に任ぜられる 1月中 土佐藩の伴修吉らと面会、薩長の離間と西国諸藩の連合をはかる 1月27、28日 長州藩の品川弥次郎に面会、薩摩藩との決別をうながす 3月 新政府参与後藤象二郎から奥羽諸藩に降伏を促すよう指示 4月 新政府参与広沢兵助と面会、会津征討の不可を説き討薩を呼びかけ 5月 新政府に意見書を提出 5月 討薩を実現すべく京都から帰藩の途につく 5月 江津にて遊撃隊長の人員勝太郎に邂逅。「除賊恢復」の誓紙を交す 5月 江戸に潜伏 5月 輪王寺宮とともに品川沖を出帆、28日平潟に上陸 6月1日 米沢に帰着 6月8日 米沢を出立、越後に向かう 6月11日 越後加茂にて「討薩の檄」を起草。翌日見附在陣の甘粕継成らにこれを示す。 6月18日 米沢に帰着 6月27日 米沢出立、上州に向かう 8月18日 上州の立沢で新政府軍の襲撃にあい敗走 8月29日 米沢に帰還 9月 宮島誠一郎のもとを訪問。米沢藩の降伏について激して迫る 12月 同志の武内政之輔、近松清と他日の賊征伐を誓う 3月 藩の諮問に応じて版籍奉還に反対する意見書を提出 6月 藩校興譲館の助教に抜擢される 8月 遊学を名目に上京する 9月 米沢藩邸に宮島誠一郎を訪ねて集議院に登用されたことを告げる 9月 集議院の寄宿生を命ぜられる 9月 集議院に質問状を提出し集議院を去る 宮島誠一郎、龍雄に謹慎を求め龍雄は軽拳なき旨を誓う 1870年
明治3年	1870年	26歳	1月 宮島誠一郎帰藩を前に再度暴拳なきよう言い含める 2月 密雲黨の学僧大俊が尾張に帰郷するに際し詩を送り他日の決起に備えるよう求める 2月17日 東京二本榎の上行寺、円真寺に降下とともに移居 2月22日 新政府に歎願書を提出。浪士たちを親兵にと訴える 2月26日 上行寺、円真寺の門前に「帰順部曲点検所」の表札を掲げる 3月11日 新政府に二度目の歎願書を提出 3月16日 新政府に三度目の歎願書を提出 3月21日 新政府に四度目の歎願書を提出 4月14日 新政府、米沢藩に対し龍雄を藩邸に引き取り謹慎のうえ、取り調べを徹底するように命じる 4月29日 新政府龍雄の歎願を却下 5月13日 新政府米沢藩に対し龍雄を国許に護送すよう命じる 5月14日 龍雄米沢に護送される 7月20日 新政府、龍雄を東京に召喚 8月5日 龍雄米沢を出立 14日 東京着 12月26日 龍雄、小塚原にて処刑される

和暦	西暦	満年齢	年譜
明治4年	1871年	27歳	(龍雄の日記である瘧癘紀行より) 6月28日 若松七日町清水屋に逗留。募兵の策を練る。 会津藩士原直録に会い意気投合し終生の友となる。 7月3日 若松を發し岩城に赴く。 7月12日 若松に戻る。羽倉、原、飯田と会う。 7月13日 若松城に登城 7月17日 若松を發す。羽倉、原と野州口に赴く。関山に至る。 7月17日 関山發。糸沢(田島)に至る。 7月20日 不能發。 7月21日 横川に至る。 7月24日 五十里に至る。大島圭介伝習隊と会談する。 7月29日 堀原温泉を發し五十里に至る。榎正師、日光より来る。 8月2日 横川から田島に至る。黒川家に泊まる。 8月4日 田島を發し黒沢に至る。細井甚四郎に泊まる。 8月12日 沼山峠を越えて沼田藩領に入る。ここは新政府軍下にあり、羽倉頼三郎、榎正坊、屋代由平は落命する。 8月25日 田島に至る。 8月26日 田島を發し途中横山嶺四郎を得る。 8月27日 大内を發し本郷に至る。 8月28日 本郷を發し坂下を通り若松に至る。 8月29日 樽原を通り米沢に至る。 9月4日 米沢藩降伏。